

## 老いに対する知識と孤独感

平林 進・杉山 愛\*・崔 洪國\*\*

### Understanding the Elderly and their Sense of Solitude

Susumu HIRABAYASHI, Ai SUGIYAMA and Hong Guk CHOI

#### 問 題

我が国の平均寿命は今や世界有数であり、高齢化が急速に進行している。21世紀半ばには国民の3人に1人が65歳以上という高齢社会を迎えようとしている。

老年期は、社会的孤立に陥りやすい時期である。孤独感は、不快で退屈な感情と結びついているため日常的に広く経験される情動の一つであり、場合によっては反社会的、非社会的な問題行動を引き起こすといわれているので、現代社会の抱えた重要な個人的、社会的な問題の一つである。

Busse (1970) によれば、老人の社会的孤立は「家族や子どもからの隔離だけでなく、より広い意味で、働く機会からの隔離や、社会の大きな集団からの隔離」によってもたらされると言う。老年期における孤立は、通常結果としてnegativeな側面が、「孤独」につながる場合が多いと考えられるからであり、またその「孤独」は次の定義にみられるように、老年期のよりよい生を著しく損なうものである。

Fromm-Reichmann (1959) によれば、「孤独は、他者との意味のある接触の欠如から生ずる極めて苦渋に満ちた感情」である。またPfeiffer (1977) によれば、「孤独は、明らかに社会的孤立に関わっているが、それとは区別される社会的病理の一つのあらわれ (form) である」という。

Peplau & Perlman (1979) によれば、「孤独感」は人の社会的関係のネットワークが、その人の願望より小さいか心理的な満足感を低下させるときに生起するとみなした。すなわち、孤独感とは人間の社会的相互作用における願望レベルと達成レベルの間の食い違いから起こると定義している。

しかし、孤独感是非常に個人的、かつ主観的に経験されるものであるため、従来、孤独感に関する実験研究や調査研究は決して信頼を得られる成果を出していたわけではない。代になってから孤独感の強さを測定するUCLA孤独感尺度が作成され、これを用いて孤独感に関する実証的研究が盛んになったのである。

老年期は人生周期における最後の段階である。この時期は、それまでに個人がつちかかってきた4つの重要なもの、a) 心身の健康、b) 経済的基盤、c) 社会的ネットワーク、d) 生きがい、を失うことから「喪失の時代」とも呼ばれる。そのためか老年者=孤独と考えがちである。

\* 名古屋女子大学大学院生活学研究科, \*\* Data Base Marketing代表理事

Peplau et al. (1982) は、老年者の孤独に関するステレオタイプ、すなわち「老年になると一人暮らしになる」、「一人暮らしをすると孤独になる」、したがって「老年になると孤独になる」という三段論法について検討を加えた。米国の人口学的資料に依拠して第1の命題「老年になると一人暮らしになる」について調べ、次の傾向を認めた。①老年になると寡夫(婦)が増大する、②おそらく女性の方が自分の年齢に相応した男性を得にくいという理由で、寡夫よりも寡婦の方が多い、③老年施設に居住している老年者は少数である。したがって、第1の命題は妥当と結論される。次に、第2の命題「一人暮らしをすると孤独になる」についての社会調査資料に基づき検討された。それによると、一人暮らしの老年者は、①社会的に孤立していない、②友だち関係や近隣関係における満足のほうが幸福感や孤独感に関係している。したがって、第2の命題は支持されない。三段論法の結論となる命題「老年になると孤独になる」についても、社会的調査資料に基づく検討が加えられた。実証的証拠は、この命題と逆に老年になるほど孤独感が低い傾向があることを示している。このようにして、Peplau et al.は、老年者の孤独に関するステレオタイプを棄却した。老年者=孤独と考えがちになるのは、人々の老いや老人に対する知識偏見の程度からだと考えることができるのではないだろうか。

Koyano, Inoue & Shibata (1987) によれば、日本では年齢と共に老いに対する誤った積極的・肯定的理解が減少していく結果、相対的に消極的・否定的理解が目立ってくること、そして誤った消極的・否定的理解の行き過ぎは米国よりも日本の方が大きいことを示している。

人々の老いや高齢者に対する知識偏見は、自らが体験することによって修正されていくのか、あるいは社会的・文化的な偏見で高齢になってもなお依然として続くのかという点で、老年期になると孤独を感じていると考えられがちなのではないだろうか。

## 目 的

本研究では、年代差により老いに対する知識や偏見の違い、実際にどの程度孤独を感じているかを調査し考察する。

Koyano, Inoue & Shibata (1987) の結果と同じように相対的に消極的・否定的理解が目立ってくるかもしれないが、年齢が増加するにつれ、老いに対する知識は消極的・否定的理解から積極的・肯定的理解に変化していくと考えられる。

実際にどの程度孤独を感じているのかの調査もまた、今までの研究結果と同じように、老年者よりも学生の方が孤独を感じていると考えられる。

過去の研究では、老いに対する知識は年齢が増加するにつれ積極的・肯定的理解に変化し孤独を実際に感じているのは学生の方が多いという結果が出ているにもかかわらず、なぜ老年者=孤独と考えがちになってしまうのかについても検討する。

老いをほとんど感じていない学生群、まださほど老いを感じていない中年群、多かれ少なかれ老いを感ずている高年群の3群に、FAQと改訂版UCLA孤独感尺度を実施し、それぞれを年齢別、性別によって考察する。

## 方 法

### 調査対象

青少年 (12歳から29歳まで)	226名 (男子23名女子203名)	
中 年 (30歳から49歳まで)	54名 (男子20名女子 34名)	
高 年 (50歳以上)	40名 (男子15名女子 25名)	合計320名

### 調査期間

1997年4月下旬から6月下旬まで

### 質問紙の構成

Palmore (1988) が開発したエイジング・クイズ (the Facts on Aging Quiz、略称FAQ) の25項目を用いた。日本語版は、古谷野亘が翻訳し、奈良県医師会 (1990) が高校生を対象に行ったものを使用した。なお、この質問紙では、中学生を対象とした時3番は削除し、5番のみじめな気持ちをさみしい気持ちに改訂している。日本の高齢者の実態を踏まえ、質問項目の10番と19番を改訂している。Palmoreの原版では10番の8割は4分の3以上19番の2割以上は15%以上となっている。本研究の質問紙では、奇数番号が偽、偶数番号が真である。なお、個々の項目の真偽の理由についてはPalmore (1988) を参照して欲しい。表1-1・表1-2は質問項目である。

表1-1 FAQ項目

1. 大多数の老人は、記憶力が落ちたり、ぼけたりする。
2. 老人になると耳や目などいわゆる五感がすべておとろえがちである。
3. ほとんどの老人は、セックスに対する興味や能力ももっていない。
4. 老人になると、肺活量がおちる傾向がある。
5. 大多数の老人は、多くの時間をみじめな気持ちですごしている。
6. 肉体的な力は、老人になるとおとろえがちである。
7. 少なくとも、1割の老人は養護老人ホーム、特別養護老人ホームなどに長期間入所している。
8. 65歳以上で車を運転する人は、若い人よりも事故を起こす率が低い。
9. ほとんどの老人は、若い人ほど効率よく働けない。
10. およそ8割の老人は健康で、ふつうの生活を送るのにさしつかえない。
11. ほとんどの老人は、自分の型にはまってしまって、なかなかそれを変えることができない。
12. 老人は、何か新しいことを学ぶのに、若い人より時間がかかる。
13. 大多数の老人にとって、新しいことを学ぶのは、ほとんど不可能である。
14. ほとんどの老人は、若い人よりも反応時間が長い。
15. 大体、老人というのは、みな同じようなものだ。
16. 大多数の老人は、めったに退屈しない。
17. 大多数の老人は、社会的に孤立しており、またさびしいものだ。
18. 老人は、若い人よりも職場で事故にあうことが少ない。
19. わが国の人口の2割以上が65歳以上老人である。
20. ほとんどの医師は、老人の治療より若いひとの治療を優先する傾向がある。
21. ひとりぐらしの老人の半分以上は、生活保護を受けている。
22. ほとんどの老人は、現在はたらいっているか、または家事や奉仕活動でもよいから何らかの仕事をしたかと思っている。
23. 老人は年をとるにつれて、信心深くなるものだ。
24. 大体の老人は、めったにおこったり、いらいらしたりしない。
25. 老人の健康状態や社会経済的な地位は、21世紀になっても今とあまり変わっていないだろう。

Russell, Peplau & Cutrona (1980) は、Russell, Peplau & Ferguson (1978) が既に標準化していた孤独感原尺度を再検討して、20項目からなる改訂版孤独感尺度を新たに構成し直したが、本

研究においては改訂版尺度を使用した。この尺度は原尺度で見られた反応バイアスを避けるために、尺度項目の表現内容をポジティブとネガティブの各10項目をこみにして無作為に列し、社会的関係での満足感と不満足感がそれぞれに反映されるように構成されている。この尺度に関する教示は、「以下の文章に述べられている事柄を常日頃あなたはどの程度感じているか教えてください」というものである。反応カテゴリーの形式は、「しばしば感じる」「時々感じる」「めったに感じない」「決して感じない」の四件法である。孤独感が強いほど高得点になるように1点から4点に得点化されたので、各被験者の得点は、最高80点から最低20点の範囲内にある。

表1-2 改訂版UCLA孤独感尺度項目

- 
1. 私は、自分の周囲の人たちと調子よくいっている。(逆転項目)
  2. 私には、人とのつきあいが無い。
  3. 私には、頼りにできる人が誰もいない。
  4. 私は、ひとりぼっちではない。(逆転項目)
  5. 私は、親しい友達の気心がわかる。(逆転項目)
  6. 私は、自分の周囲の人たちと共通点が多い。(逆転項目)
  7. 私はいま、誰とも親しくしていない。
  8. 私の興味や考えは、私の周囲の人たちとはちがう。
  9. 私は、外出好きの人間である。(逆転項目)
  10. 私には、親密感のもてる人たちがいる。(逆転項目)
  11. 私は、疎外されている
  12. 私の社会的なつながりは、うわべだけのものである。
  13. 私をよく知っている人は、誰もいない。
  14. 私は、ほかの人たちから孤立している。
  15. 私は、その気になれば人とつき合うことができる。(逆転項目)
  16. 私を、本当に理解している人たちがいる。(逆転項目)
  17. 私は、大変引っ込み思案なのでみじめである。
  18. 私には知人がいるが、気心の知れた人はいない。
  19. 私には、話し合える人たちがいる。(逆転項目)
  20. 私には、頼れる人たちがいる。(逆転項目)
- 

## 結果と考察

### I. 老いの知識の年代差

表2は、各項目の正答率及び順位の年代差を示したものである。それによると項目番号4番「肺活量」の青年と中年、5番「多くの時間をみじめに」の中年と高年・青年と高年、12番「新しいことを学ぶのに時間がかかる」の青年と中年・中年と高年、21番「独居老人の半分以上は生活保護」の中年と高年、年代差は統計的に有意である。それ以外の項目の年代差は、統計的に有意ではない。

有意になっている項目、なっていない項目の正答率を考慮に入れると、正答率の高いものと低いものがある。

表2 各項目の正答率及び順位の年代差

項目 番号	項目 内容	青少年		中年		老年		差の検定		
		正答率	順位	正答率	順位	正答率	順位	青一中	中一高	青一高
1	記憶力・ボケ	26.5%	21	31.5%	18	22.5%	23			
2	五感の衰え	78.3%	8	81.5%	4	72.5%	8			
3	セックスについての関心・能力	69.0%	10	70.2%	11	64.7%	10			
4	肺活量	85.0%	3	94.4%	2	85.0%	5	*		
5	多くの時間をみじめに	85.0%	3	79.6%	7	95.0%	1		**	*
6	肉体的な力	92.5%	1	98.1%	1	95.0%	1			
7	1割の老人は収容施設	34.5%	17	35.2%	16	41.0%	13			
8	若い人よりも車の事故が少ない	39.4%	16	35.2%	16	35.0%	17			
9	効率よく働けない	27.4%	20	29.6%	20	37.5%	15			
10	8割の老人は健康	50.0%	12	50.0%	13	56.4%	12			
11	型にはまって変えられない	32.3%	18	31.5%	18	30.0%	21			
12	新しいことを学ぶのに時間がかかる	90.7%	2	79.6%	7	92.5%	3	**	*	
13	新しいことを学べない	83.2%	6	81.5%	4	75.0%	7			
14	若い人よりも反応時間が長い	72.6%	9	70.4%	9	70.0%	9			
15	老人はみな似たようなものだ	80.5%	7	83.3%	3	80.0%	6			
16	めったにあきあきしない	23.9%	23	27.8%	21	35.0%	17			
17	社会的に孤立してさびしい	63.7%	11	70.4%	9	62.5%	11			
18	若い人よりも職場の事故が少ない	29.6%	19	18.9%	24	30.8%	19			
19	人口の2割以上が65歳以上	16.4%	24	20.4%	23	15.4%	25			
20	医者は若い人を優先する傾向	15.9%	25	18.5%	25	20.0%	24			
21	独居老人の半分以上は生活保護	40.7%	14	48.1%	14	30.8%	19		*	
22	ほとんどの老人は働いている	84.5%	5	81.5%	4	92.5%	3			
23	信心深くなる	40.3%	15	44.4%	15	37.5%	15			
24	めったにおこたたりしない	25.7%	22	27.8%	21	27.5%	22			
25	21世紀の老人の健康や経済	45.6%	13	53.7%	12	40.0%	14			

差の検定欄は \* p < 0.1, \*\* p < 0.05を意味する

正答率が有意である高い項目は、4番「肺活量」、5番「多くの時間をみじめに」、12番「新しいことを学ぶのに時間がかかる」である。4番は、青少年に比べて中年の正答率が高く、実際に肺活量がおちているのを経験し感じているのかもしれない。その反対に青少年はまだ若く肺活量がおちていないので、加齢によりおちる傾向があると出たのかもしれない。高年は実際に肺活量がおちているのかもしれないが、急におちているわけではないのでそれほど感じていない

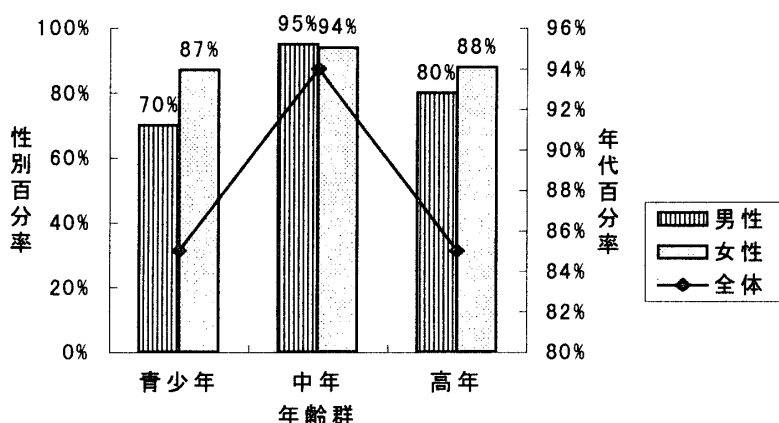


図1. 年代による肺活量の正答率の差

のかもしれない。青少年と中年の有意差10%は、青少年と中年の男性に ( $t=2.14$ ,  $df=43$ ,  $p<0.05$ ) 差があり、また青少年の男女に ( $t=2.18$ ,  $df=226$ ,  $p<0.05$ ) 差があるので、青少年男性が寄与するものだと考えられる。

5番と12番は、青少年や中年に比べて高年の正答率が高く、実際に経験をして感じているように思われる。西村・平沢 (1994) によると、5番の項目はどの年代も比較的正答率は高いが、学生群 (19-25歳559名) や中年群 (33-43歳44名) に比べて高年群 (50-80歳84名) の正答率は低い。

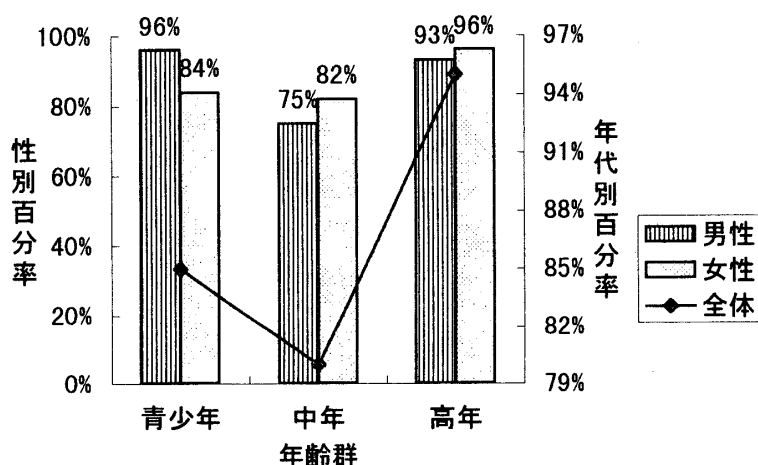


図2. 年代によるみじめさの正答率の差

高年の中に多くの時間をみじめに過ごすことを認めてはいたが、それを表現するようになってきたのではないかと考えられる。主観的な問題ではあるが、日本の社会的・文化的風土の中に、高年がみじめに感じるような年齢差別的または高齢者排他的な要因があることを示しているよ

うに思われる。

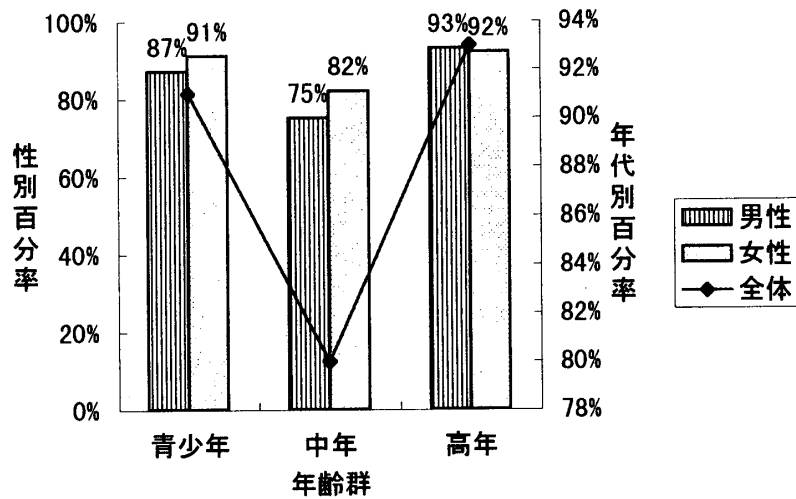


図3. 年代により新しい事を学ぶのに時間がかかるの正答率の差

正答率が有意である低い項目は、「独居老人の半分以上は生活保護」である。高年に比べて中年の正答率が高いのは、老人の生活実態を理解していることから考えられる。中年と高年の有意差10%は、中年と高年の女性に ( $t=2.85$ ,  $df=59$ ,  $p<0.01$ ) 差があり、また高年の男女に ( $t=3.39$ ,  $df=39$ ,  $p<0.01$ ) 差があるので、高年女性が寄与するものだと考えられる。

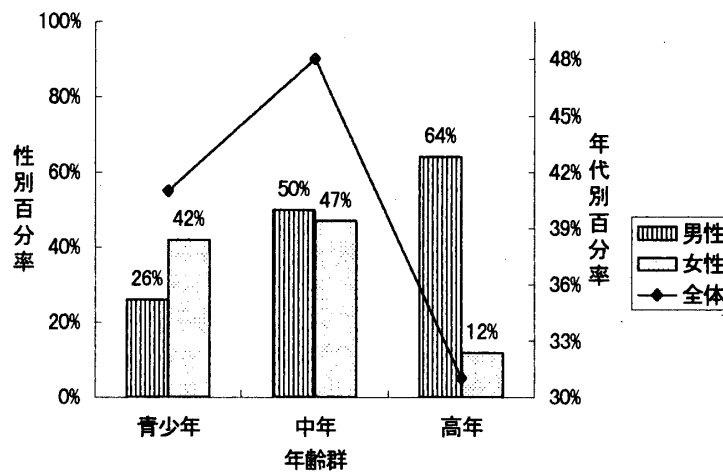


図4. 年代による生活保護の正答率の差

有意でない項目の正答率を考慮に入れると2番、3番、6番、13番、14番、15番、17番、22番、などのようにどの年代も正答率が高くて差がないものと、1番、7番、8番、9番、11番、16番、18番、19番、20番、21番、23番、24番、25番などのようにどの年代も正答率が低くて差がない項目がある。有意でない項目の比較的正答率が高い項目の特徴をみると、2番、3番、6番、14番は身体や運動機能に関係した項目で加齢による変化が外見的好くわかるということが指摘できる。また、日本人の就労意欲の高さについてはよく知られているが、それが（ほとんどの老人は働いている）に影響していると考えられることができる。

このことを諸外国と比較してみると、表3からわかるように日本は70歳代前半でも35%程度の高い就業率で、高年の就労意欲が高いことを示し日本社会の1つの特徴となっており社会全体にわりとよく浸透していることがわかる。また表3より高齢になるほど、どの国においても男女とも就業率が下降している事がわかる。日本、韓国の両国男女間の就業率に大きな差がみられる。女性は60歳代後半に急激に下降するが、男性は60歳代後半以降も就業率はかなり高い水準で維持されている。アメリカ、タイ、ドイツの3カ国就業率は男女にあまり差はなく、アメリカはゆっくり下降し、タイは60歳代前半が非常に高くその後急激に下降し、ドイツは60歳代前半ですでに多数が就業していないという違いがある。

表3 5カ国年齢別就業率 (%)

	日本		アメリカ		タイ		韓国		ドイツ	
	男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性	女性
60～64歳	74.6	53.1	48.5	41.0	61.1	48.6	62.4	50.6	22.0	11.2
65～69歳	60.9	28.1	32.4	26.8	39.1	39.7	59.8	27.1	8.6	6.7
70～74歳	46.8	28.4	21.5	16.7	24.2	22.6	36.0	17.9	1.5	0.9
75～79歳	23.7	18.1	10.3	5.6	25.9	11.1	26.6	9.7	0.0	1.3
80歳以上	16.0	11.9	1.7	2.6	11.1	12.0	10.0	10.2	3.8	0.0

(高齢者の生活と意識 1997より)

比較的理解されていない項目の特徴をみると、記憶能力や新しい環境への適応能力、信心深さなどはよく言われているが、精神的な内容で外見からはっきりとわかるものではないということが指摘できる。このような特徴が人々に偏見を生んでいるようにも考えられる。人々に生まれやすい偏見は、経験して修正されていく偏見とそうでない偏見がある。偏見は、社会的・

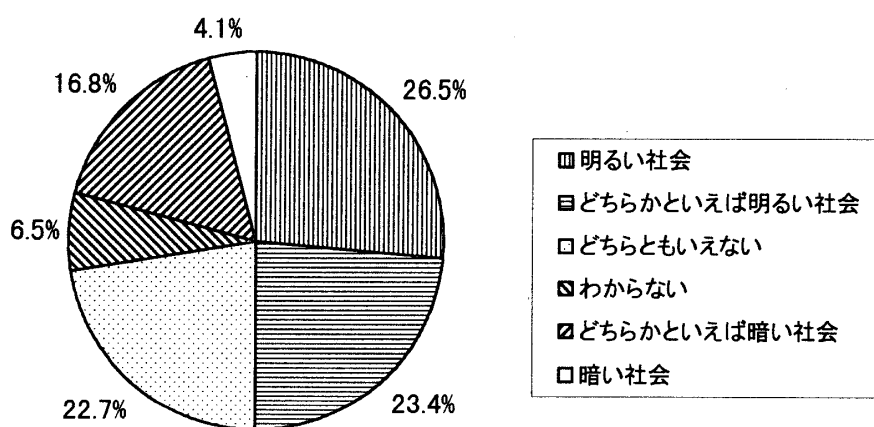


図5. 高齢社会に対する印象

文化的風土が影響しているように思われる。図5は以上を対象として高齢社会に対する印象を示したものであるが、高齢者の中でも社会に対する印象は様々である。様々な印象は、長年にわたる習慣や環境の違いによる知識や偏見が影響しているように思われる。

統計的に年代差は有意でないという項目が多くあり、今後サンプルを増やして検討したい。



II. 孤独感

表4 改訂版UCLA孤独感尺度での各被験者の得点

被験者	平均	標準偏差	N	RANGE
青少年	37.81	8.35	226	21~73
青少年 (男)	38.17	9.49	23	25~65
青少年 (女)	37.95	8.92	203	21~73
中年	41.37	11.09	54	24~63
中年 (男)	41.45	8.90	20	27~63
中年 (女)	39.76	9.64	34	24~57
高年	36.92	11.69	40	15~69
高年 (男)	38.53	9.26	15	24~55
高年 (女)	36.58	12.49	25	15~69

表4は、各被験者群が示した孤独感尺度得点と平均得点とレンジを示したものである。表4からも明らかとなり、中年において最も強い孤独感が示されている。次に青少年、高年という順である。この本研究の結果はRubinstein, Shaver & Peplau (1979) の世代による孤独感の強さに関して、青年が最も強い孤独感を示しており、次いで老人であるとする結果を一部支持するものである。

今回の調査結果では中年で強い孤独感が示されており、社会システムや文化的特質の差異が反映されていると思われる。青少年と中年 ( $p < 0.05$ )、中年と高年 ( $p < 0.1$ ) には有意な差が検出された。性差別にみると、どの年代も女性に比べて男性の方が強い孤独感を示している。どの年代別、性差別にも、有意な差は検出されなかった。

一般的に、Donson & Georges (1967)、Weiss (1973) は性差に関して、女性は男性より孤独感が強いという知見と、Shaver & Rubinstein (1979) は、やもめ暮らしの男性では同じような状態の女性に比べて、孤独感が強いという相反する結果が報告されている。

孤独感は、人々のおかれている物理的環境条件や収入、年齢、職種を含めた被験者の社会的経済的地位などと共に、夫婦の家庭内地位、地域活動への参加度などに反映される個人の心理的要因と深く関連しているため、性差に関する一般的結論を出すのは難しいと思われる。

表5 国別にみた不安感 (%)

	日本	アメリカ	タイ	韓国	ドイツ
自分自身の健康	50.1	26.9	32.9	51.0	34.3
独りぼっちで頼りになるものがない	27.9	16.1	28.3	35.4	23.1
経済的な生活が成り立たなくなる	27.7	17.9	29.0	38.3	11.3
子供達が気にかけてくれない	14.1	4.7	22.8	25.0	7.5
世の中が老人を気につけない	24.8	16.6	12.3	36.4	27.4

(高齢者の生活と意識 1997より)

表5は5カ国60歳以上を対象としたもので、不安に関する項目でいつも不安に思う事と時々不安に思う事の割合を合計したものである。それぞれの項目を健康・経済生活・孤独（家族、社会からの隔離）にわけることができる。どの国においても一番不安に感じている事は健康である。

社会から隔離されるよりも家族から隔離されると不安に感じるのはタイ、逆に他の4カ国では、社会から隔離される事の方が不安に感じている事がわかる。

韓国では他の国に比べて、どの項目においても不安を感じる割合が高い事を示している。『高齢者の生活と意識』の幸福感の調査結果についてみると同年配の人と比較した場合、「自分は幸せでない」と「あまり幸せでない」と考えている人が、韓国が最も高く (19.3%)、他の4カ国ではこれより低くなっている (タイ12.3%、ドイツ8.3%、日本6.9%、アメリカ6.3%)。韓国では幸せだと感じる事が少ないため、どの項目においても不安を感じる割合が高いのだと考えられる。

図6は老いに対する知識の社会的に孤立している項目にそうだと答えている比率と孤独感尺度をグラフで示したものである。

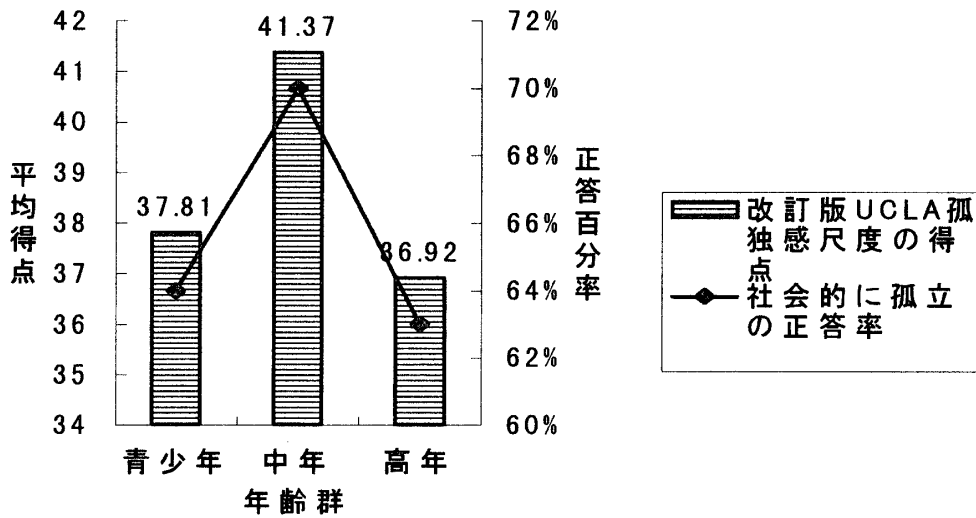


図6. 老いに対する知識と孤独感

中年群が老いると社会的に孤立していると考えているのは、現在最も孤独を感じているので、自分が高年になった時にもっと孤独・孤立するかもしれないと考えているのだと思われる。高年群は実際に最も孤独を感じていないため、老いても社会的に孤立しているとは考えていないのだと思われる。それぞれの経験によって老いに対する知識の違いや偏見は生じてしまうが、年齢が増加するにつれ積極的・肯定的理解に修正され変化していく事も考えられる。

### 要 約

現代社会の抱えた個人的・社会的な問題の一つに孤独感がある。老年期は、社会的孤立に陥りやすい時期である。Busse (1970) によれば、「家族からの隔離だけでなく、働く機会や社会の大きな集団からの隔離」によってもたらされると言う。そのためか高齢者=孤独と考えがちである。この考えは、人々の老いや高齢者に対する知識偏見の程度からだと考える事が出来るのではないだろうか。

本研究では、老いに対する知識偏見の違いにより高齢者を孤独だと感じているかを、老いに対する知識と孤独感の年代差から比較検討した。

1997年4月下旬から6月下旬に、質問紙調査法《FAQの25項目〈Palmoreが1988年に開発し古谷

野亘が1990年に翻訳)、UCLA孤独感尺度20項目〈Russell et al. が1980年に開発し工藤らが翻訳〉により、青少年226名、中年54名、高年40名を対象に行った。

老いに対する知識の年代差は、外見的变化にはあまり差が見られなかったが、外見的に明瞭でない記憶能力や精神的内容には差が見られ、高齢者に対する偏見が生まれやすい原因となっていることがわかった。

孤独感については高年群が最も孤独を感じておらず、中年群が最も孤独を感じていることがわかった。老いに対する知識の社会的に孤立している項目に対し、そうだと答えている比率は、中年群が最も高く、高年群が最も低く、中年群が老いると社会的に孤立していると考えるのは、現在最も孤独を感じているため、自分が高年になった時にもっと孤独・孤立するかもしれないと考えているからだと解釈される一方、高年群は実際に最も孤独を感じていないのは、老いても社会的に孤立しているとは考えていないからだと考えられる。人々に生まれやすい偏見は、経験して修正されていくものとそうでないものがあり社会的・文化的風土が影響しているように思われる。

#### 参考文献

- Busse, E.W. 1970 Psychoneurotic reactions and defence mechanisms in the aged. Palmore, E. (ed.) Normal Aging. Duke Univ. Press.
- Donson, C. & Georges, A. 1967 Lonely-land and bedsitter-land. Bala, North Wales: Chapples.
- Fromm-Reichmann, F. 1959 Loneliness. Psychiatry, 22, 1-15
- 厚生省編集 1997 厚生白書(平成9年版) 財団法人厚生問題研究会
- Koyano, W., Inoue, K. & Shibata, H. 1987 Negative misconceptions about aging in Japanese adults. Journal of Cross-Cultural Gerontology 2, 131-137
- 工藤力・西川正之 1983 孤独感に関する研究(1) 実験社会心理学研究 22, 2, 99-107
- 諸井克英 1995 孤独感に関する社会心理学的研究 風間書房
- 長田久雄 1981 老人の孤独に関する心理学的研究 老年社会科学 3, 111-124
- 西沢純一・平沢尚孝 1994 老いの知識の年代差 東京家政大学生生活科学研究研究所研究報告 17, 29-37
- Palmore, E. 1988 The facts on aging quiz Volume 21 in the Springer Series on Adulthood and Aging. New York: Springer Publishing Company.
- Peplau, L.A. & Perlman, D. 1979 Blueprint for a social psychological theory of loneliness. In Cook, M. & Wilson, G. (Eds.) Love and attraction. Oxford, England: Pergamon Press.
- Peplau, L.A. & Perlman, D. 1982 Loneliness: A Sourcebook of Current Theory Research and Therapy. John Wiley & Sons, Inc. (邦訳: 加藤義明監訳 1988 孤独感の心理学 誠信書房)
- Pfeiffer, E. 1977 Psychopathology and social pathology. Birren, J.E. and Schaie, K.W. (eds.) Handbook of the Psychology of Aging. Van Nostrand Reinhold.
- Rubinstein, C., Shaver, P. & Peplau, L.A. 1979 Loneliness. Human Nature, 59-65
- Russell, D., Peplau, L.A. & Cutrona, C.E. 1980 The revised UCLA Loneliness Scale: Concurrent and discriminant validity evidence. Journal of Personality and Social Psychology, 39, 472-480
- Russell, D., Peplau, L.A. & Ferguson, M.L. 1978 Developing a measure of loneliness. Journal of Personality Assessment, 42, 290-294
- Shaver, P. & Rubinstein, C.M. 1979 Living alone, loneliness, and health. Paper presented at 87th Annual Convention of the American Psychological Association, New York City
- 総務庁長官官房高齢社会対策室監修 1997 高齢者の生活と意識 中央法規出版株式会社
- Weiss, R. 1973 Loneliness: The experience of emotional and social isolation. Cambridge, Mass.: M.I.T. Press.